

# 香川大学生によるラジオ番組制作（Ⅱ）

## ～正課・正課外教育におけるFM高松コミュニティ放送との連携～

山 本 珠 美  
藤 本 佳 奈

はじめに

I．正課におけるラジオ番組制作「わくわく！高松」

II．正課外におけるラジオ番組制作「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」

おわりに

### はじめに

本稿は、2007～2013年度までに行われたFM高松コミュニティ放送（以下、FM高松）における香川大学生のラジオ番組制作実践について報告するものである。

筆者（山本）は、以前『生涯学習教育研究センター研究報告』第13号に「香川大学教育学部生によるラジオ番組制作～文部科学省現代GP「実践的総合キャリア教育の推進」の取組として～」（以下、論文Ⅰ）を投稿し、2007年度に教育学部社会教育主事特別コースの科目である「社会教育特講ⅡA」においてはじめてラジオ番組制作を行った経緯とその具体的内容、成果と課題について報告した。本稿はその続編として<sup>1)</sup>、2008年度以降継続して正課教育として番組制作に取り組んだ実践と、2013年度に正課外教育としてはじめて取り組んだ番組制作について報告する。

大学生によるラジオ番組制作がどの程度の広がりを持つ取組であるか詳細は不明であるが、いくつかの事例報告（松浦2003、北村2009、小倉2012）に見られるように、決して珍しいものとは言えないだろう。市民参加による番組制作をミッションに掲げるコミュニティFMは年々増加しており、大学生による番組制作は今度も増えることが予想される。筆者らの取組が僅かながらでも参考になれば幸いである。

なお、本稿の執筆は、Ⅰ章山本、Ⅱ章山本・藤本が担当した。

### I．正課におけるラジオ番組制作「わくわく！高松」

#### I－1．社会教育主事特別コースにおける実践力育成

大学教育において実践的な学習への注目が高まっている。社会教育主事の養成においても同様である。香川大学教育学部社会教育主事特別コースで筆者が担当している科目では、15回の授業のうち数回を実践に当てるものから、ほぼ全てを実践的内容としているものまで、科目による濃淡はあるものの、すべての科目で何らかの実践的要素を取り入れるようにしている（表1）。

「社会教育特講ⅡA」において、社会教育施設へのインタビュー成果に基づきラジオ番組を制作すると

表1. 社会教育主事特別コースにおける実践力育成の取組例

科目名	時期と単位	実践的内容
生涯学習概論Ⅱ	後期2単位	香川県教育委員会生涯学習・文化財課主催「さぬKidsかるた大会」(毎年2月中旬開催)のボランティア運営スタッフとして参加する。
生涯学習計画論A	前期2単位	『第3次岡山県生涯学習推進基本計画』に基づく学習プログラムを考案し、岡山県生涯学習センターにて発表、県職員の批評を受ける。
社会教育課題研究Ⅱ	前期2単位	小学生対象の講座(生涯学習教育研究センター主催公開セミナー)を企画し、夏休み期間中に香川県各地で開催する。
社会教育特講ⅡA	後期2単位	社会教育に関連するテーマを毎年決め、そのテーマに基づくラジオ番組を制作し、FM高松で放送する。

いう取組をはじめた理由は、論文Ⅰに述べたように、おおむね以下の6点にまとめられる。

- ① [現場を知る] 現場を訪れ、直接お話を伺うことで「社会教育の場で働く」とはどういうことなのかを知ること。
- ② [物事を深く探求する] インタビューによって、まだ世間に知られていないこと、意図的に隠されていること、あるいは暗黙知として伝えられていることなど、必ずしも文書として明らかにされていない「書かれていないこと」を読み取る力をつけること。
- ③ [コミュニケーション能力] 取材申込から実際のインタビュー、お礼状の送付に至るまで、学生みずから学外者とやりとりすることが、コミュニケーションの訓練になること。
- ④ [メディア・リテラシー] 自ら番組を制作することでメディアが「構成されたもの」であることを体験的に理解すること、そして情報を批判的に読み取ることの大切さを知ること、さらには聴く側にとどまらず作る側となりうるように発信力を高めること。
- ⑤ [本物体験] シミュレーションではなく実際に放送される番組を作ることで、学生の本気を引き出すこと。
- ⑥ [地域貢献] 本取組が各社会教育施設の広報となり、学生の地域貢献となること。

この点について筆者の考えに変化はなく、そのことが2008年度以降も取組を継続した理由である。

ところで、上記①と⑥こそは「社会教育主事」という資格を強く意識したものであるが、②～⑤は資格取得に拘らず様々な学生にとって意味のあることであり、汎用性のある学習プログラムと自負している。実態として、卒業後にいずれ社会教育主事として任用されうる自治体に就職する受講生は少数である。彼らが将来いかなる進路を取るようになるにせよ、本物の番組を制作するということはプロフェッショナル(あるいは市民)が制作する場合とやることについては何ら変わらないということであり(同レベルの番組を作ることはできないにせよ)、その経験が社会人として必要な能力を育成する上で役に立つことは間違いない。

社会人として必要な能力とは、例えば、論文Ⅰでも触れた経済産業省「社会人基礎力」の前に踏み出す力(主体性、働きかけ力、実行力)、考え抜く力(課題発見力、計画力、創造力)、チームで働く力(発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)である<sup>2)</sup>。これらは専攻を問わずあらゆる学生(社会人)に共通に求められる力とされているが、番組制作にあたってはこの中のどれかということではなく全ての能力が総合的に必要とされるのである。

「教えることは学ぶこと(To teach is to learn)」という言葉がある。人に教えるためには、教える者が

他の誰よりもその事象についてよく知っていなければならない。それに倣って言えば、「伝えることは学ぶこと（To inform is to learn）」である。責任を持って人に何かを伝えるためには、伝える物事についての深い理解が必要である。番組を「聴くに値する内容」にするためには、まずは伝え手が真摯に学ばなければならない。

FacebookなどのSNSが日常的なコミュニケーションツールとして発達し、誰もが気軽に情報発信をすることができるようになってきている。気軽さの反面、自らの発する情報にあまりに無頓着である例も少なくない。一方、限られた資源である電波を用いるラジオは、総務省の許認可事業であり、放送法や電波法の制約の下、国から免許を与えられた事業者によって展開されている。「市民による情報発信」を謳っているコミュニティFMといえども、インターネットと比べると誰もが気軽に発信できるわけではなく、ある程度のスキルが求められるし、放送内容については公共性ということを強く意識せざるを得ない。また、FM高松は高松市中心部の常盤町商店街（トキワ街）の中にあり、ガラス張りのスタジオは通行人から丸見えである。人から見られる中での収録は、学生にとっては相当な緊張を伴うようである。このような条件下で聴くに値する内容の番組を放送するためには、真剣な姿勢が求められる。実践力を身につけるには、何よりもこの「真剣さ」が必要であると思われる。

## I－2. 取組の具体的内容

2007年度から2013年度までに制作した番組は表2のとおり、計24本、720分に及ぶ。

授業の進め方は基本的には論文Iで詳細に論じた2007年度の方法から変わっていないが、改善した点は次のとおりである。

第一に、2008年度からは原則として学生だけが出演するようにし、筆者は裏方に徹することにした点である。初年度も当初はそのつもりだったのだが、番組進行役（MC）にと期待していた学生がやむを得ぬ事情によりリタイアしてしまった関係で、筆者がMCを務めた。2008年度は4番組を2番組ずつ2グループに分け、それぞれに学生MCを指名した（MCは授業中のトーク練習の様子を見て筆者が決定した）。2010年度からは2人一組のグループを作り、30分番組を前半後半に分け、前半は学生Aが話し手となり、聞き手役の学生Bに向かって自分が取材して知りえたことを話し、後半は反対に学生Aが聞き手、学生Bが話し手となる、という形にしている。ただし、履修学生数が奇数のときには筆者が聞き手として入ることもあった（2010年度、2013年度）。

第二の改善点は、年度ごとにテーマ設定をするようにしたことである。2007-2008年度は学生が関心を持った施設に取材に行っており、「社会教育施設」という大枠はあるもののストーリーとして統一感に欠けるくらいがあった。2010年度からは5本程度制作する番組全体にかかる「今年のテーマ」を学生との話し合いによって決定し、そのテーマに基づいて取材先を選定することとした。これまでのテーマは、表2にあるとおり、2010年度がコミュニティ活動（1回目）、2011年度生涯スポーツ、2012年度子育て支援、そして2013年度がコミュニティ活動（2回目）である。

第三は発声と滑舌の練習を取り入れたことである。以前より、マイクの前で話すことに慣れてもらうため、授業開始直後の10月から、身の回りのことを題材とするトーク練習（収録体験）をしている。さらに効果を上げるため、テレビ朝日アナウンス部『アナウンサーの話し方教室』（角川書店、2003年）、塩原慎二郎『アナウンサーの日本語講座』（創拓社出版、2003年）などを参考に、北原白秋「五十音」（初級）、落語の「寿限無」（中級）、歌舞伎「外郎売」（上級）を発声および滑舌練習として取り入れることとした。学生にとっては面白いようで毎年大変に盛り上がるが、果たして筆者の思惑通りに滑舌が良くなっている

表2. 「わくわく！高松」放送一覧

年度	学生数	テーマ	放送日	放送時間	取材先
2007年度	5名	(社会教育施設)	2008年 2月28日(木)	19:30～ 20:00	高松市男女共同参画センター アイバル香川
			2008年 3月6日(木)	19:30～ 20:00	高松市美術館 香川県教育委員会 保健体育課 (香川県立体育館) 香川県赤十字血液センター
2008年度	13名	(社会教育施設)	2009年 2月26日(木)	19:30～ 20:00	香川大学 (博物館、検定、公開講座)
			2009年 2月27日(金)	19:30～ 20:00	高松市中央図書館
			2009年 3月5日(木)	19:30～ 20:00	高松市レクリエーション協会 (遊びの城)
			2009年 3月6日(金)	19:30～ 20:00	二番丁コミュニティセンター 四番丁コミュニティセンター 栗林コミュニティセンター
2010年度	9名	コミュニティ 活動 (1)	2011年 3月7日(月)	12:00～ 12:30	多肥コミュニティセンター 屋島コミュニティセンター
			2011年 3月8日(火)	12:00～ 12:30	塩江コミュニティセンター
			2011年 3月9日(水)	12:00～ 12:30	栗林コミュニティセンター 古高松コミュニティセンター
			2011年 3月10日(木)	12:00～ 12:30	男木コミュニティセンター 二番丁コミュニティセンター
			2011年 3月11日(金)	12:00～ 12:30	香西コミュニティセンター 川東コミュニティセンター (東谷農村歌舞伎)
2011年度	6名	生涯スポーツ	2012年 2月27日(月)	12:00～ 12:30	高松市スポーツ少年団 総合型地域スポーツクラブ (教育学部野崎教授)
			2012年 2月28日(火)	12:00～ 12:30	コナミスポーツクラブ高松 社会人ソフトバレーボールチーム「木鶏」
			2012年 2月29日(水)	12:00～ 12:30	亀岡テニスクラブ 高松市 スポーツ振興課
2012年度	8名	子育て支援	2013年 2月25日(月)	13:00～ 13:30	高松市 子育て支援課
			2013年 2月26日(火)	13:00～ 13:30	子育て集会所 “夢てらす” たかまつファミリー・サポート・センター
			2013年 2月27日(水)	13:00～ 13:30	二番丁コミュニティセンター 川添コミュニティセンター
			2013年 2月28日(木)	13:00～ 13:30	高松市中央図書館 高松 本とおはなしの部屋
			2013年 3月1日(金)	13:00～ 13:30	下笠居おやじの会 香川県教育委員会 生涯学習・文化財課
2013年度	9名	コミュニティ 活動 (2)	2014年 2月24日(月)	13:00～ 13:30	亀阜コミュニティセンター 二番丁コミュニティセンター
			2014年 2月25日(火)	13:00～ 13:30	女木コミュニティセンター 下笠居コミュニティセンター
			2014年 2月26日(水)	13:00～ 13:30	太田中央コミュニティセンター 花園コミュニティセンター
			2014年 2月27日(木)	13:00～ 13:30	古高松南コミュニティセンター 三谷コミュニティセンター
			2014年 2月28日(金)	13:00～ 13:30	栗林コミュニティセンター

(注) 2009年度はFM高松の都合により実施せず。

かどうかについては不明である。

第四は自分たちの番組の収録前に、一度全員にFM高松での「本番体験」を課すこととしたことである。筆者は2010年1月よりFM高松にて毎週土曜日夕方30分番組のパーソナリティを偶然にも務めることとなった。FM高松開局以来続いている老舗番組「みっちゃんのオペラ大好き」という番組で、本来のパーソナリティである蓮井勉子氏が個人的事情によりしばらく番組を担当できなくなり、その役が私に回ってきたのである。蓮井氏復活後も、氏からの申し入れにより番組を二週ずつ交代で担当することになった。同番組はゲストをお呼びして仕事や趣味などについて楽しく語ってもらうトーク番組であり、ゲストの選定もパーソナリティに任されている。この番組に2～3人ずつゲストとして出演し、大学生活や将来の夢などを語ってもらうことにした。授業中にも簡単な収録体験（5分程度）はするが、それはトークを聞きなおして自分の話し方の癖（語尾がはっきりしない、早口になる、等）を知るためにシミュレーションとして行うものである。実際に放送されるわけではないので緊張は少ない。しかし本物の30分番組に出演することは独特の緊張を伴う体験である。自分たちの番組制作の前に一度「失敗」をすることになるわけであり（学生により差はあるが、何かしら反省点は必ず出てくる）、大いに役立っているようである。

そして第五は、大学に収録機材を揃えたことである。2007年度から今年度までの間に、FM高松は経営陣が大きく変わり、また所在地も変わりスタジオ数が減る（2→1）など、かなり大規模な変貌を遂げた。スタジオ使用予約は早い者勝ちであり、生放送中はその前後の時間も含め使用できず、夜間も使用不可になるなど、経営上やむを得ぬこととはいえかなり制限されるようになった。そこで、学生の都合にあわせて大学でも収録できるよう、2012年度から少しずつ機材を買い揃えることにした<sup>3)</sup>。これまでのところ本授業の本番収録はすべてFM高松のスタジオで実施することができているが、機材を揃えたことで、以前であれば授業中に行う収録体験はICレコーダーを使っていたところをスタジオ収録に近い環境でできるようになった。筆者がミキサーを担当できるようになることで、局のミキサーに頼る必要がなくなったことも、収録日の調整上大きなメリットである。また、授業中に学生に録音技術（ミキシング機材の使い方）を教えることもできるため、筆者が話者として出演する場合に学生がミキサーを担当することも可能となっている。

2013年度の授業の流れは表3のとおりである。いくつか補足すると、第4・5回に実施した「絵の説明」は、ラジオ番組の「映像がない」という特性に意識的になるため、自分だけが見ている絵（イラスト、写真、等）を、他の学生に言葉だけで伝える練習である。第5回の授業で今年度のテーマが「コミュニティ活動」と決定したのち、個々の学生が「高松市地域コミュニティ協議会情報：コミねっと高松」（<http://takamatsu.genki365.net/>）などのサイトを活用して取材先となるコミュニティセンターを決定した。9名の受講生の中には、高松市のコミュニティセンターを全く訪れたことがないという学生もいたため、第7回の授業で筆者が高松市のコミュニティセンター・コミュニティ協議会の概要について講義するとともに、第8回では大学から最も近い二番丁コミュニティセンターを全員で訪問し、根ヶ山里子センター長に現状をお話いただいた。

なお、番組タイトルとオープニング曲については、取り組みの継続性を考慮し、2007年度に決定した「わくわく！高松」と、GTS feat. MELODIE SEXTONの“Do You Wanna Get Serious”を使用している。

### I－3. 今後の課題

論文Ⅰでは番組制作の今後の課題として、インタビューとの距離の取り方を挙げた。取材は学生が個人で出向くが、予想以上に良くして頂くことが多い。高齢世代の利用者が多く、若い世代というと小学生以下と子育て世代の3、40代となるコミュニティセンターでは、「大学生が来る」ということはとても有り

表3. 授業の流れ（2013年度例）

回	日時	形式	内容	宿題
第1回	2013年 10月3日	講義	オリエンテーション、昨年度制作した番組を聴く	
第2回	2013年 10月10日	演習	滑舌練習（初級）、収録体験①	録音したトークを聞き直してダメ出し
第3回	2013年 10月24日	演習	滑舌練習（中級）、収録体験②	録音したトークを聞き直してダメ出し、今年度テーマの検討
第4回	2013年 10月31日	演習	滑舌練習（上級）、絵の説明①、今年度テーマの話し合い	今年度テーマの再考
第5回	2013年 11月7日	演習	絵の説明②、今年度テーマ決定	取材先の選定
第6回	2013年 11月14日	講義	コミュニティFM、ラジオ番組制作の流れについて理解する	↓
第7回	2013年 11月21日	講義	今年度テーマ（高松市のコミュニティ活動）について理解する	↓
第8回	2013年 11月28日	見学	二番丁コミュニティセンター訪問	↓
第9回	2013年 12月5日	演習	インタビュー取材に向けて、質問項目の立て方を学ぶ	番組企画（案）の作成（質問項目含む）
第10回	2013年 12月12日	演習	番組企画（案）のプレゼンテーション、ダメ出し	番組企画（決定版）の作成
第11回	2013年 12月19日	演習	番組企画（決定版）のプレゼンテーション	アポ取り、インタビュー取材
第12回	2014年 1月9日	演習	インタビュー取材の成果報告	原稿作成
第13回	2014年 1月16日	演習	リハーサル（月～水曜日放送分）、ダメ出し	原稿修正
第14回	2014年 1月23日	演習	リハーサル（木～金曜日放送分）、ダメ出し	原稿修正
第15回	2014年 1月30日	演習	最終リハーサル（不合格者は時間外に再度リハーサル）	取材先に原稿チェックを依頼→原稿修正（最終版作成）
時間外	2013年10月中旬～ 2014年2月上旬		FM高松ゲスト出演（原則2名ずつ）	
	2013年12月中旬～ 2014年1月中旬		インタビュー取材（各自）	
	2014年2月上旬		再リハーサル（最終リハーサル不合格者のみ）	
	2014年 2月17、19日		収録（グループ毎）	
	2014年 2月24～28日		放送	
	2014年 3月10日		反省会、取材先への礼状・番組CD送付	

難がられるようで、とりわけ歓迎されるようである。2013年度も、アポ取りの段階では30分程度という約束だったが優に2時間を超えてしまった、朝10時から午前中だけの予定がお昼ご飯を御馳走になって結局午後3時頃までお付き合いしてもらった、という話に事欠かなかった。公共交通機関で行くにはやや不便な場所にあるコミュニティセンターを訪問した学生の話によると、帰りはその土地の「見どころ」を案内がてら車で送って頂いたそうである。学生は取材先に大いに感謝し（それ自体は人としてあるべき感



図1. 2013年度の収録の様子（FM高松）

情であるが)、インタビューから聞いた話を「素晴らしい取組である」として賛辞を送るのである<sup>4)</sup>。

もちろん、中にはその評価に相応しい取組もあるだろう。しかし一方で「自画自賛」の場合もあるかもしれない。批判的な視点、「一步引いた」視点を持つことは極めて難しい。論文Ⅰに書いたことと重複するが、インタビューとの距離を保って批判的な視点で情報を伝えるには、わずか1回だけの取材では不十分であることは言うまでもない。1回限りのインタビューでは学生が予め持つ偏見あるいは無知から来る思いこみなどを完全に払拭することは到底無理である。複数を取材して比較すれば、少しはそのようなことも可能かもしれないが、15回という授業回数に制約がある中、現状の進め方では複数箇所への取材は現実問題難しい。「学生はインタビューの代弁者となりつつも、第三者として自らの意見を述べることが求められる。そのバランスはどうあればよいか。」(論文Ⅰ、p.60)という課題は、毎年悩むポイントである。

批判的に伝えるという行為には、相当な知識の積み重ねがなければならない。学生にそこまで期待するのは酷というものであろう。ただし、インタビューの話した内容をそのまま伝えるだけでは、収録のときにインタビューをスタジオに呼んで話をしてもらえば済むことである。最低限「大学生である自分が、その話を聞いて何を考えたか」という、大学生世代の意見表明をするように指導するのだが、どこまで本音を語っているのか、やや隔靴搔痒といったところである。

なお、これまでのところ、インタビューに番組を聞いてどのような感想を持たれたかということについては調べていない。個人的に(筆者に、あるいは取材した学生に)感想をいただくことがあるという程度である。第三者のリスナーがどのように感じたかも不明である。放送された番組の評価については、今後の検討課題である。

2007年度から取組を継続してきたことで見えてきた課題もある。

筆者はFM高松でボランティアのパーソナリティをしているとはいえ、メディアで働いたプロフェッショナルとしての経験はなく、素人にすぎない。そのような素人が発信できることがコミュニティFMの魅力であるとはいえ、聴き手のことを考えれば、質の低い番組を放送するわけにはいかない。学生を指導する筆者自身のスキルアップが必須であることは言うまでもなく、試行錯誤を繰り返しながら、実践の中で能力向上に努めているつもりである。2007年度からの「社会教育特講ⅡA」、そして2010年1月からのパーソナリティ経験によって、半期の授業という限られた時間の中でどうすれば一定以上のクオリティを保った番組作りができるか、ある程度の「型」が定まりつつあるとの手応えを感じている。

このような経験の積み重ねが筆者（教員）にはあるが、学生は（単位を落とさない限り）毎年変わる。毎年新しい、未経験の学生を相手にすることになる。筆者には「教え方」のノウハウが蓄積されているのだが、学生はせっかく身につけたスキルを次の番組作りに活かすことはないのである。

大学教育という観点で見れば、本授業が番組制作者の育成を主たる目的としているわけではない以上、ここで身につけた能力を他の場面で活かしてもらえればそれで十分である。一方で、質の高い番組作りという観点で見ると、スキルアップした学生を今後の番組制作に活用できないのはもったいない。受講するのは主に2、3年生であり、少なくとも次の年度はまだ在学中であるので、前年度の学生を次年度に活用する仕組みができないものだろうか。過去には翌年度の授業に来て自分の経験を話してもらったことはあるが、より本格的に番組制作に関わることはできないか。単位取得済みの学生の好意に頼るだけでは難しく、TAのような仕組みが活用できれば良いと思うのだが、それも財政的に難しいのが現状である。（スキルアップした学生の活用については、Ⅱ章の正課外におけるラジオ番組制作で改めて述べる。）

さて、もう一つの課題は、取材先の重複である。表2から分かる通り、二番丁コミュニティセンターが4回（2008、2010、2012、2013）、栗林コミュニティセンターが3回（2008、2010、2013）、高松市中央図書館が2回（2008、2012）となっている<sup>5)</sup>。取材先の選定は原則として学生に任せている。学生から「ここに取材に行きたい」との申し出のあった相手を筆者が拒否することはないし、また筆者から「ここに行きなさい」と指示することもない。にもかかわらず重複してしまうのは、ここに挙げた施設はいずれも近場であり授業の空き時間などの短時間で訪問しやすいこと、活動内容が広く知られており安心して取材に行くことができること、といった理由が考えられる。もちろん、重複それ自体は必ずしも問題ではなく、異なる視点で番組を作ることができれば良いのだが、学生が注目する取組（あるいは取材先が伝えて欲しいと望む取組）が同じとなり、結果的に以前制作した番組と似通った内容になってしまうこともある。発展的に継続していくためには、このようなある意味「楽な」相手だけではなく、できる限り新しい取材対象を発掘し、挑戦することが必要であることは間違いない。

## Ⅱ. 正課外におけるラジオ番組制作「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」

### Ⅱ－1. 学生レポーター養成講座

「社会教育特講ⅡA」は、筆者が担当している他の社会教育主事資格取得のための授業と比べても、学生の満足度の高さが際立っている。ラジオ番組制作という手法が学生に好意的に受け入れられた結果だろう。しかし、授業で実施する限り、受講生は教育学部に限られる。他学部の中にも番組制作に興味を持つ学生がいるのではないか、この授業経験を全学に応用することはできないか、漠然と考えていた。

2013年1月、瀬戸内国際芸術祭2013開催にあたって、地元の香川大学も貢献するべく教員から事業提案を募ることとするとの学長通知が届いた時、芸術祭の番組を学生と一緒に制作してはどうかと考えたのは、そのような事情からである。「コミュニティ放送局と連携した「瀬戸内国際芸術祭2013」特集番組の制作」というタイトルの企画書を提出したところ、長尾省吾学長を委員長とする香川大学瀬戸内国際芸術祭実行委員会にて無事認められ、15万円の番組制作費が与えられることとなった。

こうして、プロジェクトに参加する学生を広く募集することとなったのだが、未経験の学生がいきなり番組制作をすることはできない。そこで、番組制作の方法（企画、取材、収録、編集等）を学ぶ「学生レポーター養成講座」を実施することとし、キャリア支援センターの正課外講座シリーズ「デキル大学生になろう！」の実践講座に位置づけた。「デキル大学生になろう！」は毎年実施しているもので、2013年度



は10講座が開設されている。表現力、傾聴力、調整力などをそれぞれ原則90分一コマで学ぶものであるが、番組制作にはそれらすべてが必要とされることもあり、従来の90分の単発講座とは別に複数回からなる実践講座という枠を新たに設けてもらうこととしたのである。

「学生レポーター養成講座」は5月～7月まで全7回とし（実際は5/15、6/4、6/18、7/2、7/9の全5回）、同講座修了後に実際の番組制作に進む流れとした（なお、「社会教育特講ⅡA」の単位取得済みの学生は養成講座の受講を免除することとしていたが、該当者はいなかった）。主に全学共通教育科目の主題A（全学生必修科目）を通じて広報をし、5～10名程度の学生が申し込むことを見込んでいたが、実際に申し込んだ学生は4名で、そのうち1名は養成講座の初期に脱落、1名は養成講座は終了したものの第1回の収録後に辞めることとなってしまった。結局、養成講座から番組制作まですべての過程に継続して関わったのは、加藤昇（工学部1年）と廣瀬渉（経済学部1年）の学生2名のみであった<sup>6)</sup>。

「学生レポーター養成講座」では、はじめにラジオ番組の制作の流れを説明し、その後正課と同じく収録の「本番体験」および番組宣伝としてFM高松「みっちゃんのおペラ大好き」にゲスト出演した。その後、番組収録に必要な機材とその使い方の説明や、番組タイトル、オープニング曲についての話し合いをした。この過程で、番組タイトルは香大生presents「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」に、オープニング曲は、夏会期がRIP SLYMEの“Good Day”、秋会期がandropの“Voice”を使用することに決まった。

なお、本格的な番組制作開始前に役割分担を決めた。プロジェクトへの参加学生数が限られていたこともあり、過重な負担を避けるため、加藤、廣瀬の学生二人の役割は番組MCに限定した。番組ディレク

**瀬戸内国際芸術祭2013**  
**学生レポーター募集!**

瀬戸内国際芸術祭2013のシーズン中に放送される  
FM815（FM高松コミュニティ放送）の特別番組を  
制作する学生レポーターを募集します。

マスコミ志望の学生。  
ラジオ番組に出演したい学生。  
言語能力を磨きたい学生。  
どしどしご応募下さい!

★申込み方法などは裏面へ

《締切》  
5月13日(月) AM10:00

■瀬戸内国際芸術祭2013 香川大学プロジェクト  
■学年凡そ大学生になろう【実践編】

**【募集人数】**  
10名程度（学部・学年不問）  
ただし応募者多数の場合は、  
5月15日（水）に選考を  
行う可能性があります。

**【経費】**  
取材にかかる費用のうち、下記は  
支給します。  
・瀬戸内国際芸術祭バスポート  
・交通費（香川大学又は自宅～現地）  
なおアルバイトではありませんので  
謝金は出ません。

**【事前研修】** 5月15日（水）～7月17日（水）の原則として  
水曜日3コマ（13：00～14：30）に事前研修を行います。  
必ず全ての研修（全7回）に出席してください。  
ただし、過去3年間に教育学部「社会教育特講ⅡA」の単位を取得した人、  
ラジオ番組の制作にかかわった経験のある人は、事前研修を免除します。

<b>第1回</b>	5月15日(水)	■オリエンテーション 本プロジェクトについて説明をします。 応募者多数のときは、選考を行う可能性があります。
<b>第2回</b>	5月29日(水)	■ラジオ番組制作の流れを理解しよう ラジオ番組を制作する手順について学びます。
<b>第3回</b>	6月12日(水)	■マイクの前で話してみよう マイクの前で話す体験をします。 収録に使う機材の使用方法についても学びます。
<b>第4回</b>	6月19日(水)	■滑舌をよくしよう アナウンサーのトレーニングメソッドを用いて、 滑舌をよくする訓練をします。
<b>第5回</b>	6月26日(水)	■番組企画案を作ってみよう 30分の番組のストーリーを考えます。 何を伝えたいのか、どこに取材に行きたいのか、あわせて検討します。
<b>第6回</b>	7月3日(水)	■収録を体験しよう 他番組へ出演し、番組の収録を行います。
<b>第7回</b>	7月17日(水)	■番組制作本番へ向けて 自分が担当する回の企画、取材日程、制作スタッフを決定します。

■研修会場：研究交流棟6階第2講義室 ■研修時間：13：00～14：30  
【備考】担当講師の業務の都合上、日程が変更する可能性があります。基本的に水曜日3コマに行います。

**【申込方法】**  
サイトにアクセスし、下記内容を書き込んだ上  
申し込んでください。  
①氏名 ②学部・学年  
③志望動機(200字程度)  
④ラジオ番組制作経験の有無  
**締切は5月13日(月) 10：00です。**

URL：http://www.sysca.  
kagawa-u.ac.jp/cie/  
検索ワード：『香川大学』  
『デジタル大学』

**【実際の業務の流れ】**  
夏および秋シーズンの期間中、会場を訪問取材  
します。後日、取材の成果に基づき原稿を執筆  
します。収録リハーサルを経て、本番収録という  
流れになります。  
(夏シーズンは、これらの一連のことを  
夏季休暇中に実施することになります。)

**【問い合わせ】**  
香川大学生涯学習教育研究センター 岩本 謙  
yamamoto@oc.kagawa-u.ac.jp  
※連絡はメールで行いますので、あらかじめ  
Eメールアドレスからのメール（PCから送信）が  
受信できるように設定しておいて下さい。

図2. 学生レポーター養成講座のチラシ

ターを筆者（山本）が担当し、番組企画やゲスト出演者との交渉、収録後の編集を行った。アシスタントディレクター（AD）はキャリア支援センター助教である筆者（藤本）と、事務補佐員の大原が務め、主に藤本が収録に際してのミキサーや島への取材にかかる業務全般を、大原が広報デザインを担当した。



図3. 学生レポーター養成講座の様子

## Ⅱ－２．番組制作の実際

### Ⅱ－２－１．概要

「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」(全10回)は、瀬戸内国際芸術祭2013の夏会期（7月20日～9月1日）および秋会期（10月5日～11月4日）の期間中<sup>7)</sup>、毎週水曜日22：00～22：30に放送され、同じ週の土曜日15：30～16：00に再放送された（後述するとおり第4回放送のみ再放送なし）。初回放送は7月24日（水）（再放送7月27日（土））、最終回は10月30日（水）（再放送11月2日（土））であった。放送日および内容は表4のとおりである。

番組制作は第1回放送より10日ほど早く開始され、7月15日に芸術祭開始直前の小豆島をプロジェクトメンバー全員で訪問し、7月19日に第1回分の収録をした。以後、最終回の収録を行った10月17日まで、番組制作は続いた。

### Ⅱ－２－２．番組コンセプト及び構成

当番組は「瀬戸内国際芸術祭2013と、芸術祭で活躍する香大生を、香大生が紹介すること」をコンセプトとした。

実は、当初の予定では、当プロジェクト参加学生が瀬戸内国際芸術祭の会場となっている全ての島（東7島＝直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島／西5島＝沙弥島、本島、高見島、栗島、伊吹島）を分担して訪問し、その時の様子をレポートする形式を想定していた。「瀬戸内国際芸術祭2013を紹介する番組」であって、「芸術祭で活躍する香大生を紹介する」ことは考えていなかったのである。しかし、全ての島の見学をして、さらに収録すると、すべてを学生二人でこなすことは到底不可能であった。学生の主たる役割は番組MCに限定することとした。そして、30分番組を前半・後半に分け、前半はMC自身が訪れた島に関するフリートーク、後半でゲスト出演者とのトークとすることを基本スタイルとした（その時々事情により30分すべてをゲストとのトーク、あるいはMC（＋山本・藤本・大原）のフリートークとすることもあった）。ゲスト出演者は当プロジェクト以外の香川大学瀬戸内国際芸術祭プロ

表4. 「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」放送一覧

時期	回	本放送	再放送	内容	MC	出演者
夏会期	第1回	2013年7月24日(水) 22:00～22:30	2013年7月27日(土) 15:30～16:00	[前半] 小豆島アートの旅 [後半] いりこの島の心温まるコンサート	加藤 昇 廣瀬 渉 (他1名)	伊吹島ハートアイランドコンサート(教育学部生4名)
	第2回	2013年7月31日(水) 22:00～22:30	2013年8月3日(土) 15:30～16:00	[前半] 小豆島でスイーツ三昧! [後半] 復活! 老舗喫茶店	廣瀬 渉 加藤 昇	小豆島SAKATEプロジェクト「喫茶白鳥」(経済学部生2名)
	第3回	2013年8月7日(水) 22:00～22:30	2013年8月10日(土) 15:30～16:00	[前半] 伊吹島ハートアイランドコンサートに行ってきました! [後半] 屋島の夜景は100万ドル!?	廣瀬 渉 加藤 昇	屋島山上ナイトツアー(教育学部生1名、留学生1名)
	第4回 Part 1	2013年8月14日(水) 22:00～22:30		学生レポーター体験Part 1 [前半] 豊島、男2人旅 [後半] 男木島、女木島探訪	加藤 昇 廣瀬 渉	UNGLチャレンジ参加者(山口大学2名、香川大学1名)
	第4回 Part 2	2013年8月17日(土) 15:30～16:00		学生レポーター体験Part 2 [前半] 嵐の訪れた直島へ! [後半] 山口大学との交流を振り返って	廣瀬 渉 加藤 昇	UNGLチャレンジ参加者(山口大学2名、香川大学1名)
	第5回	2013年8月21日(水) 22:00～22:30	2013年8月24日(土) 15:30～16:00	今日はまるごと直島特集!	加藤 昇 廣瀬 渉	直島地域活性化プロジェクト(経済学部4名)
	第6回	2013年8月28日(水) 22:00～22:30	2013年8月31日(土) 15:30～16:00	[前半] 伊吹島への旅～番外編～ [後半] 大島・犬島訪問記	廣瀬 渉	スタッフ3名(山本・藤本・大原)
秋会期	第7回	2013年10月9日(水) 22:00～22:30	2013年10月12日(土) 15:30～16:00	[前半] 夏休み、小豆島&豊島に行ってきました! [後半] 小豆島でミニ歩き遍路を体験しよう!	加藤 昇 廣瀬 渉	香川大学遍路研究会(経済学部3名)
	第8回	2013年10月16日(水) 22:00～22:30	2013年10月19日(土) 15:30～16:00	[前半] 腹が減っては島には渡れない!～西讃B級グルメの旅～ [後半] イケメンアーティストとの出会い～栗島編～	廣瀬 渉 加藤 昇	スタッフ2名(藤本・大原)
	第9回	2013年10月23日(水) 22:00～22:30	2013年10月26日(土) 15:30～16:00	[前半] なぜここにキリン???～高見島編～ [後半] MC男2人旅Part 1～本島編～	加藤 昇 廣瀬 渉	スタッフ2名(藤本・大原)
	第10回	2013年10月30日(水) 22:00～22:30	2013年11月2日(土) 15:30～16:00	[前半] MC男2人旅Part 2～本島編～ [後半] Art Time Junctionを振り返って	廣瀬 渉 加藤 昇	スタッフ3名(山本・藤本・大原)

(注) MC欄は上段がメインMC、下段がアシスタントMCである。

ジェクトへ参加している学生に依頼した。それにより、「芸術祭で活躍する香大生を、香大生が紹介する」という番組趣旨が加わったのである。結果的に、香川大学が瀬戸内の島々で展開しているプロジェクトを紹介することとなり、大学の広報に貢献できたと思われる。

### Ⅱ-2-3. 取材

授業や他の業務との兼ね合いもあり全ての島・会場を訪問するのは難しかったが、伝え手としてはできるだけ芸術祭の会場を訪れ、その様子を知っておく必要がある。そのため、本経費を用いて、小豆島(7月15日)、伊吹島(8月2日)、栗島・高見島(9月30日)、本島(10月12日)を訪問した。高松港から船に乗って行く東の島々は、芸術祭以外でも訪問する機会が多いため、西の4島を優先的に訪れることとし

た。

また、本経費とは関わりなく、当プロジェクト期間中にプライベートで（山本→沙弥島、大原→豊島・犬島・粟島、加藤→小豆島、廣瀬→大島）あるいは集中講義で（廣瀬→豊島）訪れることもあり、その際のできごと番組で披露している。結果的には、ゲスト出演者の話題も含め、全10回の放送で芸術祭の会場となった全ての島について紹介することができ、当初の目的は無事達成することができた。

#### Ⅱ－２－４．収録と編集

収録は学生の都合とスタジオの空き状況を勘案し、FM高松または大学で収録した。

正課における番組制作と同じレベルの丁寧な事前準備は時間的に不可能であり、オープニングなど一部の定型的な発話部分を除き原稿は作成しなかった。ゲスト出演の学生たちには事前に筆者（山本）がメールで簡単な依頼をしていたのみで、収録本番が初顔合わせとなり、簡単な打ち合わせの後すぐに収録に入るといった状況であった。そのため、MCの学生二人は慣れるまで途中何度も止まってしまい、正課のように収録本番は取り直しや編集の必要はない、ということにはならなかった。収録後の編集作業に膨大な時間がかかってしまったのは想定外であった。

ただし、第5回頃からはMCも慣れ、筆者二人も収録・編集のコツをつかんだので、編集にかかる時間は短時間で済むようになった。

#### Ⅱ－２－５．広報

6月3日から11月4日まで番組公式ブログ（Ameba）を開設し、主にプロジェクトメンバーが日替わりで月曜日から金曜日まで原則毎日更新した。ゲスト出演があった時には彼らにも記事の投稿をお願いした。7月中旬までは学生レポーター養成講座の様子や、以前訪れた時の島の印象、番組制作がはじまってからは取材、収録、編集の裏話、（ゲスト出演者からは）島でのイベント告知、そして番組予告などを投稿した。総記事数は123本である。同ブログは番組終了後一ヶ月はそのまま残しておいたが、2013年12月に閉鎖した。

ブログ以外にも、番組ポスター、名刺（裏面に放送日、視聴方法、ブログ情報を掲載）、ポストカード、手作り団扇を制作し、配布した（図4-1～2）。ブログを含め、これらのデザインは大原が担当した。学生二人で番組CM（20秒）も制作し、FM高松で随時流して頂いた。

香川大学HPトップページの「ニュース・トピックス」欄にも記事を掲載した。掲載したのは第1回放送直前の7月22日であったが、偶然なのか、前期試験期間に入る時期であったためか、通常は数日毎に新規トピックが投稿されすぐにトップページからは読めなくなるのだが、この時期は話題に乏しく8月に入るまで10日間あまりトップページに出続けた。このため、学生は多くの友人から「見たよ！」と声をかけられたと言い、広報面で随分助けられた。

#### Ⅱ－２－６．UNGLへの一部開放

ここで第4回Part1、Part2の放送について補足しておきたい。

香川大学は現在、文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシップ・プログラム」（平成24～28年度、代表校愛媛大学、通称UNGL）に連携校として参加している。同プログラムでは各連携校がそれぞれの大学で実施している主にリーダーシップ養成のための正課外教育を連携する他大学に開放することとしている。香川大学では平成25年度は特に瀬戸内国際芸術祭関連



香大生Presents  
**Art Time Junction**  
～ぼくらの芸術祭～

毎週水曜日 22:00～22:30  
Radio18 が FM815 から OA!!

夏	秋
① 7月24日	⑦ 10月9日
② 7月31日	⑧ 10月16日
③ 8月7日	⑨ 10月23日
④ 8月14日	⑩ 10月30日
⑤ 8月21日	
⑥ 8月28日	

再放送は毎週土曜日  
15:30～16:00

★番組ブログも毎日更新中！★  
<http://ameblo.jp/setoge2013-kup/>

★インターネット視聴もできます★  
ライマルラジオ→FM高松をクリック!!  
<http://www.simulradio.jp/>

瀬戸内国際芸術祭 2013 平成 25 年度大学授業プロジェクト（広報）



毎週水曜日 22:00～22:30 Radio18 が FM815 から OA!!

番組ブログも毎日更新中!  
<http://ameblo.jp/setoge2013-kup/>

インターネット視聴可能!  
サイマルラジオ→FM高松をクリック!!  
<http://www.simulradio.jp/>

	本放送 (水)	再放送 (土)
夏	7月24日	7月27日
	7月31日	8月3日
	8月7日	8月10日
	8月14日	8月17日
	8月21日	8月24日
秋	8月28日	8月31日
	10月9日	10月12日
	10月16日	10月19日
	10月23日	10月26日
	10月30日	11月2日

毎週水曜日  
22:00  
↓  
22:30  
Radio18 が  
FM815 から OA!!

★番組ブログも毎日更新中★  
<http://ameblo.jp/setoge2013-kup/>

★インターネット視聴もできます★  
サイマルラジオ→FM高松をクリック!!  
<http://www.simulradio.jp/>

図4－1．広報（ブログ、ポスター、ポストカード、名刺裏デザイン）

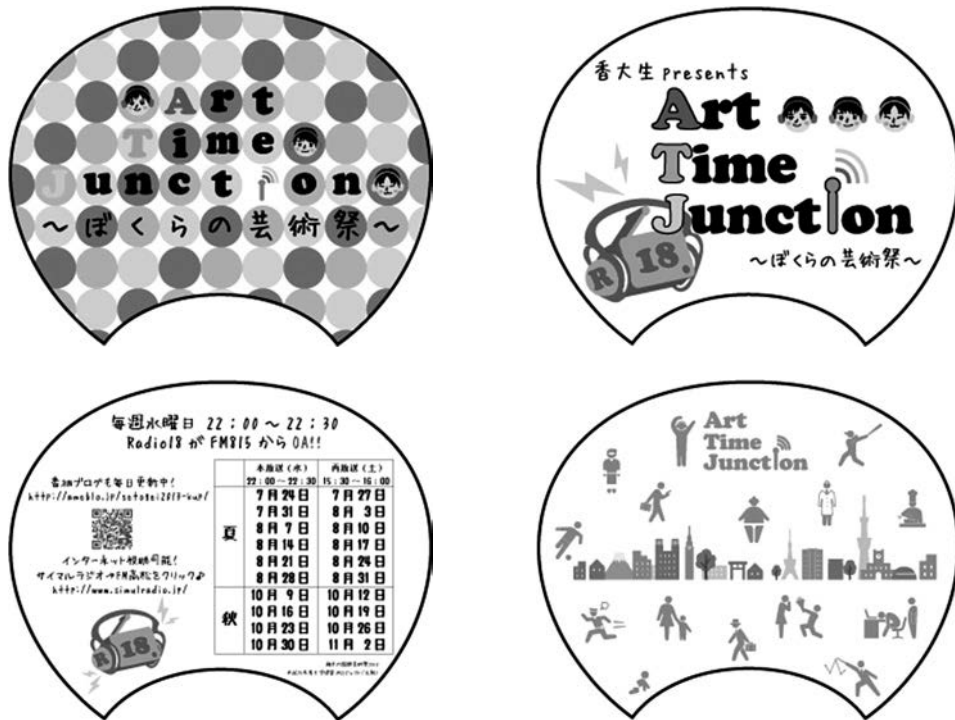


図4-2. 広報(団扇)

の正課外教育プログラムが複数展開されていたため、また、他大学生がわざわざ香川に来ようとするためには、土地の魅力を活かした取組であることが必要であるだろうとの考えから、芸術祭関連のプログラムを中心に開放することとした。筆者らの取組もその1つに含まれた。

とはいえ、連携校はいずれも香川からは遠い。学生が半年のプロジェクトに継続的に参加することは不可能である。そのため、前期試験が終わってから本学の夏季一斉休業が始まるまでの8月7～9日の3日間、他大学生も参加できる特別メニュー「瀬戸内国際芸術祭2013 FM高松 学生レポーター チャレンジプログラム」(図5、以下、UNGLチャレンジ)を用意し、第4回放送分を制作することとした。

UNGLチャレンジには山口大学から2名、香川大学から1名が参加した(3名とも高校時代は放送部に所属していた)。加藤・廣瀬のプロジェクト学生二人も参加した。初日は午後からはじまり、「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」の番組趣旨説明、収録体験、自らの企画案作成を行い、夜は高松港の芸術祭会場と屋島の夜景の見学に行った。二日目はUNGLチャレンジ参加者のみ、それぞれが選んだ島を各自で訪問した(山口大生は一人が直島、もう一人が豊島、香川大生は男木島・女木島の2島)。三日目ははじめに企画案のプレゼンを行った。当初はコンペで勝ち残った学生のみを出演させる予定であったが、参加人数が少数だったこと、企画案は甲乙つけがたかったことから、全員が出演することとなった。そのため、第4回の放送のみ、8月14日をPart1、17日をPart2と別々の番組2本を作ることとなり、かわりに再放送はなしとした。

**瀬戸内国際芸術祭2013**

**FM高松 学生レポーター  
チャレンジプログラム**

瀬戸内国際芸術祭2013取材し、FM高松コミュニティ放送（通称FM815）の特集番組（番組タイトル未定）に出演、レポートするプログラムです。  
※ただし、出演するためには、事前に行われるプレゼン審査会を勝ち抜くことが必須要件です。

マスコミ志望の学生。  
ラジオ番組に出演したい学生。  
言語能力を磨きたい学生。  
**どしどしご応募下さい！**

★詳細は裏面へ★

■瀬戸内国際芸術祭2013 香川大学プロジェクト  
■西日本から世界に羽たく異文化交流型リーダーシッププログラム  
（文部科学省 大学間連携共同教育推進事業）

《締切》  
7月17日(水) PM5:00

**【日時】** 8月7日（水）～9日（金）2泊3日  
（台風等の悪天候の場合は、船が運行休止になるため、8月20日（火）～22日（木）に変更）

**【担当】** 生涯学習教育センター准教授 山本珠美

**【協力】** 瀬戸内国際芸術祭香川大学プロジェクトメンバーの香川大学生

**【定員】** 9名（学年不問・最少催行人数5名）

1日目	香川大学	13:00～14:00	プログラムの趣旨説明
		14:00～14:15	自己紹介
		14:15～15:00	ラジオ収録体験
		15:00～15:15	休憩
		15:15～16:45	取材先の選定・番組企画案の作成①
		16:45～18:45	瀬戸内国際芸術祭（高松港エリア）見学
		18:45～19:45	夕食（香川のB級グルメ第一弾）
		19:45～20:45	取材先の選定・番組企画案の作成②
		20:45～21:00	取材にあたっての諸注意
		2日目	芸術祭会場
3日目	香川大学	9:00～10:00	プレゼン準備
		10:00～11:30	審査会
		11:30～12:45	昼食（香川のB級グルメ第二弾） ※この間に、審査員による審査を行う。
		12:45～13:00	審査結果発表
		13:00～15:00	FM815 番組収録

**【申込方法】**  
所属大学を通して申し込んで下さい。  
  
（以下、各大学でご記入下さい。）

**【交通費の負担】**  
香川大学への往復交通費、宿泊代、会場（島々）への往復交通費、作品鑑賞料、および食費はすべて自己負担（ないしは参加大学の負担）となります。  
※香川大学キャンパス内の宿泊施設をご案内できます。（一泊2,200～2,500円）

**【FM815とは??】**  
いま、全国各地に続々と誕生している地域密着型のコミュニティFM放送局の一つです。受信範囲は高松市域に限られますが、インターネットでの放送もしていますので、「サイマルラジオ」にアクセスすれば世界中どこでも視聴可能です。  
公式サイト <http://www.fm815.com>

図5 UNGLチャレンジのチラシ



図6 UNGLチャレンジの様子（右：初日の収録体験、左：三日目の収録）

### Ⅱ－3. 正課と正課外の違い

正課における番組制作との大きな違いは、一人の学生にかかる負担の大きさと、それに付随することであるが、収録までの準備時間が圧倒的に足りないことであった。正課で番組制作する際は、一人の学生が作る番組は30分番組一本のみである。そしてその30分のために90分授業を15回実施しており、時間をかけて取材先の選定をし、何度もダメ出ししながら企画（番組構成）を練り直すこともした。原稿を作る時間

もあれば、滑舌練習をする余裕もある。しかし、この正課外の番組制作は二人の学生で10本（結果的に11本）作らなければならない、また二人とも1年生ということもあり時間割は上級生に比べるとかなり詰まっている。空き時間が少ない中、時間をかけて企画を練ったり原稿を書いたりすることはできない。学生二人の瀬戸内国際芸術祭および離島に関する知識が豊富ではないこともあって、企画（番組構成およびゲスト出演者）について学生と相談するという手順を踏むことはあきらめ、筆者（山本）が独断で決定して学生に指示を出すこととした。原稿も作成せず、番組冒頭、中間の音楽が入る前、エンディングのセリフのフォーマットだけを決め、あとは事前に簡単な打ち合わせをしてのフリートークとした。原稿なしで30分という尺にあわせるタイムコントロールは、多少経験がある者でも大変難しいことである。長めに収録し、その後編集して尺に収める作業をすることにしたが、この編集作業には相当な時間を費やすこととなった。

一方、悪いことばかりではなく、正課より良かったこともある。

条件的にプラスだったのは、第一に番組制作費が与えられたことである。「軍資金」があれば、それまで正課でやりたくてもできなかったことができるようになる。制作費の多くは電波使用料と瀬戸内国際芸術祭パスポート、島への交通費に費やされたのが事実であるが、それでも広報費にお金をかけることができたことは（その効果がいかほどであったかは不明であるものの）幸いであった。

第二に、キャリア支援センターの正課外講座に位置付けたことで、同センター教職員二人（藤本・大原）からの協力が得られたのも大きい。正課の方は、基本的に山本の担当授業であるから、一人ですべてをこなしている。しかし正課外では藤本が主にミキサーを担当することで山本は学生のトーク指導に集中することができたし、大原のデザイン力は広報において大活躍であった。また、個人的なことになるが、実は山本が9～10月にかけて体調不良となり一時期は出勤できず、秋会期の放送は中止せざるを得ないかもしれない状況であった。無事に当初の予定通り放送できたのは、二人のおかげである。

SNS（アメーバブログ）を用いて、ラジオに限らない情報発信ができたことが第三の違いとして挙げられる。正課でも以前からやりたいと思っていたことの一つであるが、これまでのところ実現してはいない。コメントの記入などがあまりなかったのは残念であるが、アクセス数が多いと励みになったのは事実である。

そして最後に何より重要なのは、「ラジオが好き」で「自分で番組を作りたい」という熱意が学生二人にあったことである。正課の教育学部生も真面目な学生たちであり、熱意がないわけではない。否、授業が進むにつれて「良い番組を作ろう」という情熱を持つようになる。しかし、はじめから「ラジオ番組を作りたい」と思って受講するのではなく、あくまでも社会教育主事の資格を取得するために受講するのである。そもそも最近の学生にはラジオ聴取習慣はなく、普段はラジオを聞かないような学生たちが受講している。その一方、正課外の二人は普段からラジオを聞いていて、ラジオ番組というものに対するイメージも明瞭である。話すことに夢中になると、ついマイクから離れてしまう、あるいは余計な部分を触ってしまう（雑音が挿入されてしまう）など、マイクの前での話し方については改善が必要であるし、ゲストを迎えた際になかなか言葉をつなぐことができずに間が空いてしまうなど、MCの能力という点ではまだまだ向上の余地はある。しかし、多少拙い部分があったとしても、「自分で発信をしたい」という思いを持って、途中脱落することなくマイクの前で話し続けたことは高く評価できることであろう。

たとえテスト期間中であろうがレポート締切が迫ってようが、放送日が決まっている以上番組を作らなければならない。番組枠を埋める責任が生じる。学生が二人しかいないことで、負担がやや重くなってしまったかも知れない。にもかかわらず最後までやり遂げたことは、ラジオ番組制作のスキルというだけに



とどまらないプラスアルファを身につけることになったのではないかと感じている。

## Ⅱ－４．成果と課題

「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」は瀬戸内国際芸術祭2013と芸術祭で活躍する香大生を、香大生が紹介するラジオ番組である。そのため番組には瀬戸内国際芸術祭香川大学プロジェクトに参加している香大生に多数出演してもらった。紹介したプロジェクトは、伊吹島ハートアイランドコンサート、小豆島SATAKEプロジェクト（喫茶白鳥）、屋島山上ナイトツアー、直島地域活性化プロジェクト（和cafeぐう）、小豆島ミニ歩き遍路体験の5つである。これらは瀬戸内国際芸術祭を盛り上げる一翼を担っているものだが、それと同時に地域に根ざした学生中心の取組でもある。

大学・学生の地域貢献という観点から考えると、このような取組が地域社会に浸透することは望ましいことである。しかし実際は、地域社会はもちろん、学内においてさえ関係部局を除いては意外と知られていないことが多い。今回こうした学生と地域社会との関わり的一端を、ラジオ番組を通じて地域社会に広く発信することができたのは、成果のひとつだろう。

このように、当番組は地域に根ざした学生中心の取組を、地域社会に発信する役割を担っていたといえるが、この番組制作自体も地域に根ざした学生中心の取組である。番組では、学生のプロジェクトを紹介するだけでなく、MCの学生自らが取材した内容も報告している。取材では、芸術祭の島々に赴き、作品を鑑賞したり、現地のアーティストに話を聞かせてもらったりした。

学生たちの生活空間は、大学が所在する高松市が中心である。このような機会でもない限り島に行くことはほとんどない。そのため学生にとって取材活動は新鮮な体験だったのだろう。番組では実際に見聞きしたことを、学生は非常に生き活きと語っていた。島々での体験を学生自身の言葉で語ることにより、パンフレットには掲載されていない芸術祭や島々の新たな魅力を伝えることができたのではないだろうか。学生による地域の魅力の発信、このことも取組から得られた成果だろう。

ここまで述べた2つの成果は、大学・学生の地域貢献にかかわるものである。大学教育の観点から考えると、やはり学生の成長という点は見過ごすことはできない。MCの学生はプロジェクトの初期から番組制作に関わってきた。ラジオは好きだが番組制作は初めてで、MCの経験もない。授業やゼミでのプレゼン経験すら乏しい1年生が、芸術祭の魅力を伝え、ゲストから話を引き出せるのか、MCの学生はもちろん、教職員も不安を感じていた。そうした中で収録がスタートしたのだが、回を重ねるごとに不安を感じることはなくなり、頼もしさを感じるようになった。

そうした変化をもたらしたのは、一重に学生の成長によるものだ。収録の裏話になるが、本番で話す内容は基本的にMC二人に任せていた。番組の流れを記した簡単な台本はあるが、具体的に何を話すか、ゲストに何を質問するのかはMCの裁量による。どうすれば伝わるように話せるか、うまく話を引き出すにはどうしたらよいか、学生自らが考え、工夫した。そうした試行錯誤を重ねることで、当初感じられたぎこちなさが無くなり、徐々に番組全体に安定感が出るようになった。「習うより慣れろ」ということわざのように、場数を踏むことで学生はMCとしてのコツをつかんでいったのである。

以上、地域社会に向けた学生の取組の発信、学生による地域の魅力の発信、そして学生の成長の3点が本取組から得られた大きな成果である。もちろんこの他にも細かい成果はたくさんある。しかし、成果ばかりを強調しても、活動の発展は見込めない。以下では、番組制作の過程で気づいた課題について2点ほど述べたい。

まず1点目は、プロジェクトに関わった学生メンバーが少なかったことである。準備段階から最終放送

まですべてに関わったメンバーは2人である。人数が少ないため、取材や収録の日程調整や当日の動きなどは小回りも効いてスムーズに進んだ。機動性や柔軟性という利点はあるが、やはり学生にかかる負担は大きかった。負担を考慮しMCしか経験させられなかったが、番組に出演して話すことだけが番組制作ではない。もう少し人数がいれば、企画、ゲスト出演者との交渉、編集にも携わることができただろう。学生同士の交流や番組の活性化という点から考えても、もう少しメンバーが必要だったといえる。集まった学生の少なさについては、学生募集の広報が不十分であったことが原因である。今後活動を続けていくのであれば、新規メンバーの獲得に向け、募集等の工夫が必要である。

2点目の課題は、プロジェクトの継続に関わるものである。番組では、瀬戸内国際芸術祭の紹介と芸術祭で活躍する香大生を紹介するというコンセプトのもと活動を行ってきた。そのため芸術祭が終了すると同時に番組も終了したわけだが、だからといってこのまま活動自体を止めてしまうのは非常にもったいない。成果でも示したように、学生による地域貢献や学生の成長にもつながっている。何よりも学生自身、継続の意志を持っている。次年度に継続することによって、今年できなかった企画や編集などのスキルを新たに身につけることができるだけでなく、新規メンバーの学生に対して指導的役割を果たすこととなり、そのことが彼らの能力向上にも役立つことは間違いない。そうした点を踏まえると、一過性の取組に落ち着かせるのではなく、活動を継続する方が大学や学生にとって望ましいのではないか。活動の継続には、番組コンセプト変更、新規メンバーの募集、費用や場所の確保など考慮すべき事項は多々あるが、大学として前向きに検討すべきであろう。

## おわりに

コミュニティ放送局（コミュニティFM）は、1992年の放送法改正により、それまでの県域をサービスエリアとした放送局とは別に、市町村を単位としたコミュニティFMが存在できるよう規制緩和されたことで誕生した。1992年に北海道函館市に第1号のFMいるかが開局、以後、1998年に100局、2007年に200局、そして現在では277局（2013年10月現在）と、毎年10～15局程度増加している（FM高松は1996年開局）<sup>8)</sup>。

放送局によって多少異なるものの、市民参加はコミュニティFMの理念の一つである。市民による自主的な番組企画・制作は「パブリック・アクセス」と言われるが（津田・平塚2006など）、メディアを市民社会のツールとして活用する動きは今後も広まっていくことと思われる。コミュニティFMに着目して、その市民発信の実態を記した文献も少しずつ目にするようになった（金山・金山2005、金山2007、加藤2010、紺野2010など）。

とはいえ、市民による番組制作が上手くいくためにはいくつかの条件がある。松野良一はそのことについて次の2点が重要であると述べる。「1つは、教育研修体制がしっかりしているかどうかである。もう1つは、メディアと市民団体が対等で、メディアは番組制作の権限を市民に渡すが、一方で市民は番組に責任をもっているかどうかであろう」（松野2005、p.122）。筆者の経験に照らして、松野の指摘どおりであると思う。筆者自身まだまだスキルアップしていかなければならない立場ではあるが、学生に対しては一定以上のクオリティを持った番組を制作する指導はできている。また、FM高松とは信頼関係があり、番組について制作上のアドバイスは頂くが「検閲」されたことは一度もない。そのことが、我々のモチベーション維持に大いに役立っていることは間違いない。

ところで、本稿執筆中、「Art Time Junction～ぼくらの芸術祭～」のプロジェクトメンバー5名で京都

市のコミュニティFM「京都三条ラジオカフェ」（NPO京都コミュニティ放送）を訪問した。次年度以降の取組継続のために、他大学の学生がどのように番組制作を行っているのか話を伺うためである。京都は大学数も多く、学生による番組が多数制作・放送されている。訪問の際には、理事であり放送局長である時岡浩二氏と、「下鴨セブン～府大生7人による〇〇な話～」を制作している京都府立大学公共政策学部公共政策学科の3年生3名に貴重なお話を伺うことができた。UNGLで山口大生と交流した時にも感じたことであるが、やはり同世代の学生との交流は双方にとって刺激になる。今後活動を継続していくにあたって、他大学との交流もより一層図っていきたいと考えている。

## 【注】

- 1) 論文タイトルについて、前は「香川大学教育学部生によるラジオ番組制作」であったが、Ⅱ章で詳しく述べるように正課外教育では教育学部以外の他学部生が参加しているため、本稿では「香川大学生によるラジオ番組制作」としている。内容は続編と考えて頂いて差し支えない。
- 2) 社会人基礎力は、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で提唱された「学士力」の4つの要素、すなわち、1. 専攻する特定の学問分野における基本的知識の体系的な理解、2. 汎用的技能（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）、3. 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力）、4. 統合的な学習経験と創造的思考力（自らが立てた新たな課題を解決する能力）と重なる部分は多い。他にも、国際的に注目が集まる「キー・コンピテンシー」（OECD）の3つのカテゴリー、1. 道具を相互作用的に用いる力（A. 言語、記号、テキストを相互作用的に用いる能力、B. 知識や情報を相互作用的に用いる能力、C. 技術を相互作用的に用いる能力）、2. 異質な集団で交流する力（A. 他者と良好な関係を作る能力、B. 協力する能力、C. 争いを処理し、解決する能力）、3. 自律的に活動する力（A. 大きな展望の中で活動する力、B. 人生計画や個人的活動を設計し実行する力、C. 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する力）との共通項も少なくない。
- 3) 揃えた機材は、ミキサー（YAMAHA MW12CX）1台、マイク（SHURE PG58）・マイクスタンド・ウィンドスクリーン5セット、ヘッドフォン1個。ノートパソコンとCDラジカセ、スピーカーは既存の備品を活用。収録・編集ソフトはFM高松と同じくSound It!を使用。必要な時教室に持参し、その都度セッティングしている。
- 4) 鈴木真理が「調査」をめぐる述べている以下の記述については、自らを振り返って大いに反省すべき点である。「大学生を対象にして、特定の地域を対象とした『地域社会教育調査』という試みがよくおこなわれることもある。（中略）社会教育あるいは調査対象の地域（教員の何らかのつながり・関与が存在していることが通例）に関して知識の乏しい学生を、地域の人々と『交流』させるなかで、学生の関心や意欲をかき立てるもので、何もわからない無垢な《というか、無知な、か。》学生が、短絡的に紹介された人々に親近感を抱くことになる。地域といっても、その住民は多様であるし、支配・権力構造などは、部外者には簡単にはわかるはずがないのである。それを短期間のうちに『報告書』を仕上げるということまでおこなうわけで、調査としては無謀なことである」（鈴木2012、p.206）。筆者がやっていることも「調査」と言ってしまうのは無謀な試みと断じられるであろう。一回のインタビューで全て分かった気になることだけは避けなければならないと、肝に銘じておくべきである。
- 5) 高松市では44のコミュニティ協議会が51のコミュニティセンターを運営している（原則1コミュニティ協議会1コミュニティセンターだが、44のコミュニティ協議会のうち5箇所は複数のコミュニティセンターを運営している）。コミュニティセンターだけでこれだけの数があるのである。ただし、市町村合併により高松市の面積は非常に広がっており、特に南端は徳島県との県境となっている。公共交通機関では行きにくいセンターも少なくない。本授業は、後に述べる正課外の取組と違い経費の支援を受けているわけではないため、取材にかかる交通費は学生の自己負担である。そのあたりの事情が市中心部の取材先を選びやすくなっている理由でもあるだろう。

- 6) 学生レポーター養成講座への申込学生が少なくなることが予想された段階で、香川大学の放送部および放送研究会に協力依頼をした。しかし、両団体ともそもそも学生数が少なく、団体の本来の活動で精一杯のため、断られてしまった。
- 7) 瀬戸内国際芸術祭2013は春会期（3月20日～4月21日）も開催されたが、準備期間が間に合わないため、春会期中の番組制作は最初から予定に入れなかった。
- 8) 総務省電波利用ホームページ「コミュニティ放送の現状」(<http://www.tele.soumu.go.jp/j/adm/system/bc/now/>) 2014年1月31日閲覧。

## 【参考文献】

- 小倉淳（2012）「メディア業界における産学連携の実践とその教育効果Ⅰ—bayfam学生ラジオレポーター研究ノートⅠ—」、『江戸川大学紀要』第22号、pp.249-266.
- 加藤晴明（2010）「ラジオパーソナリティ論のための予備的考察—“メディア語り”と「市民の情報発信」を再考する—」、『中京大学現代社会学部紀要』4-1、pp.33-79.
- 金山勉・金山智子（2005）『やさしいマスコミ入門：発信する市民への手引き』勁草書房.
- 金山智子編（2007）『コミュニティ・メディア：コミュニティFMが地域をつなぐ』慶應義塾大学出版会.
- 北村順生（2009）「ラジオ放送設備を活用した放送リテラシー教育プロジェクト」、新潟大学大学教育開発研究センター『大学教育研究年報』第14号、pp.5-12.
- 紺野望（2010）『コミュニティFM進化論：地域活力・地域防災の新たな担い手』株式会社ショパン.
- 塩原慎二郎（2003）『アナウンサーの日本語講座』創拓社出版.
- 鈴木真理（2012）「特論1 社会教育計画と調査」、鈴木真理・山本珠美・熊谷慎之輔編『社会教育計画の基礎〔新版〕』学文社、pp.201-210.
- 津田正夫・平塚千尋編（2006）『新版パブリック・アクセスを学ぶ人のために』世界思想社.
- テレビ朝日アナウンス部（2003）『アナウンサーの話し方教室』角川書店.
- 松浦照子（2003）「ラジオ番組の制作—名古屋短期大学現代教養学科「日本語表現」実践報告—」、表現学会『表現研究』第78号、pp.1-8.
- 松野良一（2005）『市民メディア論：デジタル時代のパラダイムシフト』ナカニシヤ出版.